報告

夢洲の持つ自然再生の可能性を広く伝えたい

文・写真　加賀まゆみ（理事・夢洲調査グループ）
夢洲調査グループ

写真-1　2区の池にはクロツラヘラサギがいた。初見である。（2021.9.26）

9月、いつまでも夏のようだったが、コアジサシに続き、セイタカシギの親子も無事旅立った。暑さは続いていたが、夢洲は秋の花が咲き始めた。トンボやバッタは相変わらず多い。ハマゴウやウラギクが美しい花を咲かせている。道の傍らに哺乳類の死体があった。数頭が一緒に過ごすのを何度も見ていたヌートリアだ。最近は姿も糞も見かけなくなったな、と思っていたところだった。死体は昆虫の幼虫に覆われ、次のいのちにつながっていく。

今私たちにできることすべてを

生きもの調査がちょっと一段落した8月、私たちは調査データをまとめ、夢洲で確認した希少種をリストアップして「私たちからの環境影響評価準備書要約版」として各所に送付した。そしてそろそろ出されるべきはずの万博協会からの環境影響評価準備書を待ちながら、本編と資料編の作成を進めていた。そして10月1日、万博協会からも準備書縦覧開始。11月15日まで市民の意見募集というスケジュールに合わせ、その内容を読み込み、夢洲の生物多様性をなんとか保全し続けられるよう、活動をつづけた。

優先課題は、万博協会の環境影響評価準備書に市民からたくさんの意見を出してもらうこと。そのために、生物多様性の面からどこに着眼し、どういう意見をだしたらよいか、万博協会の説明会にも手分けして出席し、それを踏まえてオンライン説明会や講演会を開いた。また夢洲の自然を知ってもらうため、動画やホームページの写真アルバムなどを公開、SNSでの発信などに力を入れた。「私たちからの環境影響評価準備書」や保全協会としての意見書は、夏原会長が率先してまとめていった。

後退した万博のアセス

環境影響評価準備書と一言でいってもピンとこない人が多いと思う。開発で環境を変化させるときには事業者が「環境アセスメント」という行政手続きを踏まえなければならない。大阪市では調査の「方法書」が2年前に出され、それに市長意見等で修正を加え、調査した結果が今回の「準備書」となる。準備書にもまた市民意見や専門委員会の答申を受けた上で市長意見をいれて「評価書」を作成し、それにしたがって事業を実施する、と条例ではこういう流れになっているそうだ。（詳しくは、協会ホームページ>自然保護運動>夢洲の未来の自然

写真-2　シロチドリ（環境省・大阪府VU）の寛ぐ水たまりに降り立つハマシギの群れ（2021.10.31）

写真-3　ツクシガモ：環境省VU（絶滅危惧Ⅱ類）、（2020.12.20）

写真-4　ハマゴウ：大阪府VU（絶滅危惧Ⅱ類）、在来海岸植物（2021.9.26）

写真-5　ウラギク：環境省・大阪府NT（準絶滅危惧）、塩性湿地特有の植物（2021.10.3）

環境を考える＞2025関西万博・私たちからの環境影響評価準備書を参照）

だが、環境アセスメントの手続きが終わっていないのに、夢洲ではすでにどんどん埋め立て工事が進んでいる。万博協会が主催する「環境影響評価準備書説明会」に行って、それはなぜか質問した。夢洲は大阪市が40年以上前に人工島をつくる事業として認可されている（当時はまだ環境アセスメント条例ができる前）。その人工島の土地を、万博協会は借りて使用することになっている。よって、「万博の施設を作り始める前にアセスメントの手続きが終わればよい」との返事。確かに法的には間違いではなさそうだ。しかし万博協会の準備書の中をみると、野鳥などの生物種については確認しているのに、万博施設建設工事や開催期間中に「影響なし」という結果が並んでいる。では具体的にどのような水辺や植栽になるのか？と質問すると、まだきちんとした計画はできていない、という。何を根拠に「影響なし」と言えるのかよくわからない。「夢洲はゴミ埋め立て地」という固定概念から自由になって、「野生の力で生物多様性のホットスポットとなった夢洲」という現在の状態をスタート時点にできないのだろうか。環境への配慮は「愛・地球博」より、かなり後退している。

なにより腹立たしいのは、購入土砂によってすでに造成された3区の土を、もう一度掘り起こして2区に運び、希少な水草も生息する生物多様性の宝庫の塩性湿地を埋めようとしていることだ。3区に計画されているIRの開業が大幅に遅れることがわかった時点で、土砂を移動させるのではなく、万博開催を3区に移動する、という発想の転換はできなかったのか。

生物多様性を万博のレガシーに！

ホシハジロ飛来数全国２位※1、ツクシガモ飛来数本州1位※2、希少種のコアジサシやセイタカシギの繁殖地※3、絶滅とされていた植物が突然現れる自然再生力※4、この夢洲のもつポテンシャルは、万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」として、なにより注目すべきことではないだろうか。

いま私たちのいちばんの障壁になっているのは、「所詮ぺんぺん草しか生えていないゴミの島でしょ」という社会の固定イメージだ。いまならまだ間に合う。埋め立てを止め、「池～塩性湿地～ヨシ原という一連の生態系の自然再生力を万博のレガシーに！」そう強く願う。

※1　2020.1.12,本州では1位

※2　2020.1.12, 2021.1.11,いずれも環境省のガンカモ類の生息調査

※3　2021年、当協会の調査より

※4　大阪市立自然史博物館発表